

通し番号	4 1 5 1
------	---------

分類番号	17-34-13-01
------	-------------

(成果情報名) カキ「早秋」における人工受粉による生理落果軽減
[要約] 食味良好で着色が優れているが、生理落果が非常に多い極早生のカキ「早秋」において、人工受粉により確実に種子を入れることにより、生理落果終了後の結実率は約67%となり、花粉遮断区の約15%に対して飛躍的に生理落果が軽減された。
(実施機関・部名) 神奈川県農業技術センター果樹花き研究部 連絡先0463-58-0333

[背景・ねらい]

カキ「早秋」は9月下旬から収穫できる完全甘柿で、食味や着色が優れており、「西村早生」や「伊豆」に替わる可能性がある有望品種であるが、単為結果力、種子形成力が高くなく、生理落果が多い傾向にある。そこで生理落果を防ぐための人工受粉の効果と受粉と果実品質の関係について検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1 生理落果が終了した7月18日の結実率は、人工受粉区66.7%、花粉遮断区15.2%で、人工受粉されなかった幼果は極めて高い落果率であった(図1)。
- 2 横径、縦径、果径指数、1果重は試験区間に差は認められなかった。1果重は人工受粉区は218.0g、花粉遮断区は220.7gであった(表1)。
- 3 着色は花粉遮断区がやや優れ、Brix糖度は人工受粉区がやや高かったが、大きな差はなかった。含核数は人工受粉区2.4個に対して花粉遮断区は0.3個だった(表1)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 「早秋」を導入する場合は、安定生産のために人工受粉が必要なので、経営の中で人工受粉に労力配分できるか検討すること。
- 2 受粉樹が十分に混植されており、訪花昆虫が多い環境の園では、自然受粉により花粉遮断区よりも結実率が高まると思われる。

[具体的データ]

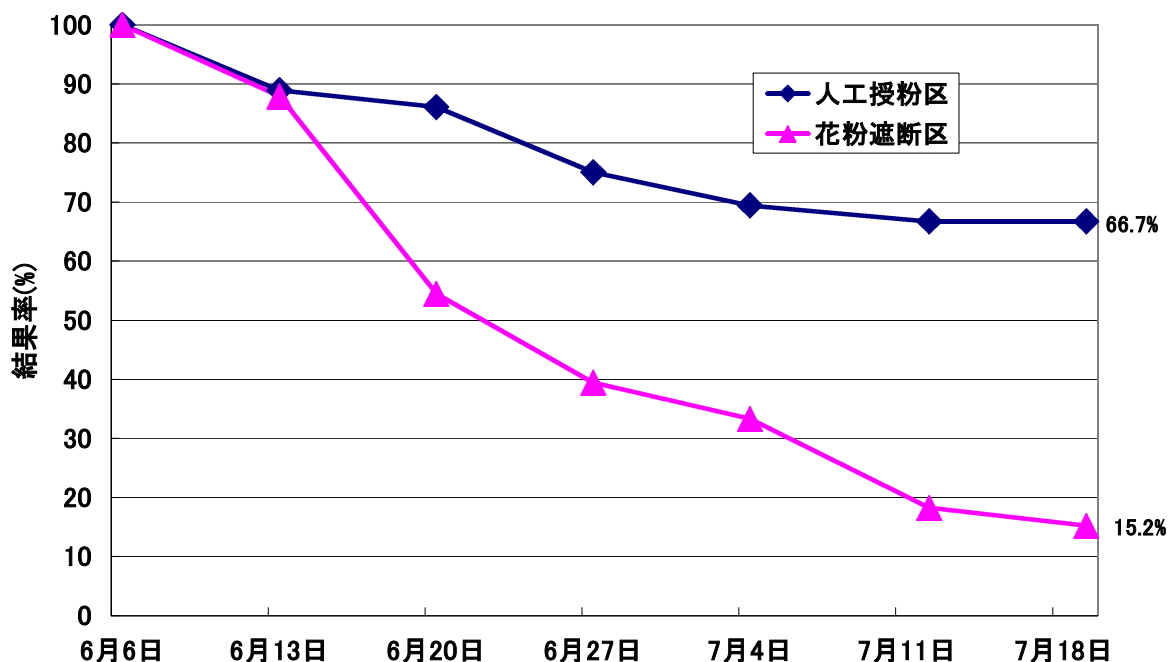


図1 人工授粉の生理落果軽減効果

表1 試験区別の果実品質

収穫日：10月3日

試験区	横径 (mm)	縦径 (mm)	果形指数 ^x	1果重 (g)	果皮色 ^y (C.C) (赤道部)	糖度 (Brix%)	種子数 (個)
人工受粉区	80.2	55.3	145.3	218.0	4.7	16.0	2.4
花粉遮断区	80.7	55.4	145.7	220.7	5.7	15.3	0.3

^x 果形指数は、横径／縦径×100

^y 果皮色は農水省果樹試基準カラーチャート使用

[資料名] 平成17年度試験研究成績書（果樹）
 [研究課題名] カキ「早秋」の高品質安定生産技術の確立
 [研究期間] 平成16～18年度
 [研究者担当名] 北尾一郎・関達哉